

## 声

「キャロン……」

「ラモー様？ ……あっ」

ラモー・ルーの声に笑顔で振り向いたキャロンの表情が一瞬凍り付く。そこに立っていたのはマリオ。キャロンにはそれがラモー・ルーが変化<sup>へんげ</sup>した姿だと分かっていたし、マリオ・ラモー・ルーとは今までに何回かセックスもした。それでもマリオにレイプされたことはキャロンにとってトラウマとなっていた。

「この体がそろそろ恋しくなってきたのではないか？ フフフ」

全裸のマリオはいきり立つペニスを見せつけるようにキャロンに近付きながら、パチンと指を鳴らした。

「きゃあっ！」

手脚を何かに掴まれ、強く引っ張られたと思った次の瞬間、キャロンは背後にあった大きな石碑に大の字にはりつけ磔にされていた。

「いっ、あうっ……」

爪先がやっと地面に付くか付かないかの絶妙な高さで、磔はりつけにされ、彼女の両腕は重力に引っ張られ、痛みが走る。

キッキキッキと意地悪く笑ってるかのような手枷足枷の鎖の音が、今から始まるうとしている被虐的性戯を予感させ、キャロンの体を昂たかぶらせる。

「フッフ」

マリオはキャロンの服を引き裂き素裸にすると、彼女の膺ウラギナに指を滑り込ませた。

「ああんっ！ ……あっん……」

キャロンの蜜壺は既に潤んでおり、マリオの指を易々やすやすと奥まで迎え入れた。

「はああん……だめ……ああっ」

肉褰ほぐを解すような指遣いが少女の桜色の唇から甘い吐息を溢あふれさせる。

「さあ、どういう具合に可愛がって欲しい？」

マリオに瞳の中を覗き込むように見つめられ、キャロンは無意識に目を逸そらせた。

「フツ、やはりこの顔は好かんか？ おまえを強姦した男の顔だからな」

「ラモーン様がどんな姿でもあたしは嫌ったりしません」

キャロンは強がるようにマリオを真っ直ぐに見据えた……

「あはあっ……あああんっ」

が、マリオの指の蠢うごめきがキャロンの表情をすぐに蕩とろけさせる。

「ククク、愛いやつよ」

ニヤリと笑うと、マリオは果実に齧かじり付くようにキャロンの乳房を舐め回し始めた。ブチュツ、ジュルツ、ジュルツ！

「きやああっ！」

態わざと下品な音を立て、荒々しく乳房に舌を這わし、乳首をきつく吸い上げる。

「痛いっ！ ああっ！」

マリオは乳首の虐待を終えると、そのまま舌を彼女の下腹部へと這わせていき、キャロンの勃起したクリトリスを甘噛みする。

「ひっ！ 千切れる！ 千切れちゃうっ！ あああっ！」

乱暴な愛撫がキャロンの被虐マゾヒズム性愛に火を点け、彼女はさらに強い刺激を求めた。

「あはあっ……もつと強く……ああんっ」

もどかしそうに腰を動かすキャロン。

「ククク、もうこの指ではおまえを満足させられないか……」

キャロンの膺ヴァギナを弄もてあそんでいたマリオの指が無数の触手へと形を変え、クリトリス、尿

道、アヌスを同時に甚振いたぶる。

「あああっ！ひっああああっ！」

やがて激しい触手の責めがキャロンを絶頂に誘う。

「ああんっ！ ああっ！ はああああんっ！」

ビュッ！ ビュッ！ プシヤアアア！

彼女の腹筋がギュッギュッと緊張し、女陰からは盛大に潮が噴き上がる。キャロンの潮吹きに喝采を送るかのように彼女を縛める鎖がジャツジャツと石碑を打っていた。

「はあ……はあ……」

キャロンの潤んだ視線は天を向いたマリオのペニスに向けられていた。

「それを……ちようだい……」

磔はりつけにされた未だ少女の面影を残す体が牡おすを求め、艶なまめかしく腰をくねらせる。

「フフフ」

マリオはキャロンに体を重ねると、しゃくり上げるようにペニスで膣ヴァギナを貫き、激しくピストン運動を始めた。

「ひっ、あああっ！ はあああんっ！」

ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、

すんなりとペニスを飲み込んだキャロンの膣ヴァギナから愛液と淫猥な音が溢れ出す。

ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、  
 マリオは一突き／＼キャランの体を跳ね上げ、落ちてきたところを亀頭でポルチオを突く。

「ああっ！ ああっ！ さっ裂けちやう！ はああんっ！」

目の前にはマリオのニヤけた顔。レイプされた時のあの顔と同じ、キャランが悶える姿を楽しそうに見ている。

(ラモー様と分かっても、やっぱりこの顔は大嫌い……だけど)

ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、

「はんっ はうっ！ んんっああっ……」

荒々しいが、牝おんなの悦ぶポイントを十二分に心得ている竿遣いに、キャランの瞳から悦楽の涙こぼが零れ落ちる。

ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、

亀頭の頭突きに子宮がブルブルと震えてるのを感じるキャラン。

(そうよ、そう……お腹の奥をドンドンされるの……好き……)

ズツチュツ、ズツチュツ、ズツチュツ、

より深く子宮を抉えぐろうとマリオの腹筋が逞たくましく躍動する。

(あたし……遅たくましい体に乱暴にされるの、すごく興奮しちゃう……)

ズッチュツ、ズッチュツ、ズッチュツ、

「ああっ、もつと！ あああっ……お腹なかを突いて！」

ズッチュツ、ズッチュツ、ズッチュツ、

「はあっ！ あんっ！ はんっ！ ああっ！」

マリオは苦しそうに喘あえぐキャロンの口をディープキスで塞いだ。

「んんっ！ ……んん……んんっ」

マリオの舌がキャロンの舌に執拗おつひに絡みつき、呼吸困難に陥おちいらせる。

「んんっ！ んっ！ んんん！」

キャロンが窒息寸前になるのを見計らい、彼女の唇を解放するマリオ。

「はあっ！ ああっ！ はあっ！」

軽い酸欠状態がキャロンの思考を奪い、一方で体の感度を増幅させていた。

「はああっ！ あああっ！ ああああんっ！」

体が爆発しそうなほどの快感にキャロンの体がブルブルと震え出す。

「ああっ！ 胎内なかに欲しいの！ 一杯！ 一杯ちようだい！」

それに応えるようにペニスはドクドクと脈動を始め、精液を爆発させた。

「ひっ、いくっ、ああっ！ ……イクううーっ！」

熱い逆<sup>ほとばし</sup>り<sup>り</sup>で、ポルチオを焼かれる快感がキャロンの体を電撃のように駆け抜け、彼女の体はビクビクと痙攣<sup>けいれん</sup>していた。

「フッフ」

キュウキュウと肉槍を締め付ける肉壺の感触を一頻<sup>ひとしき</sup>り楽しむと、マリオはキャロンから体を離し、彼女の自由を奪っていた枷を外した。

「はあ……あ」

その場にへたり込むキャロンの目の前にペニスを突きつけるマリオ。

「……あはっ」

おもちゃを貰った子供のような笑顔になるキャロン。

人間男性<sup>マ</sup>の<sup>リ</sup>の<sup>オ</sup>ペニスを初めて間近で見えた時、その形と手触りが妙に気に入ってしまい、それ以来キャロンはペニスをおもちゃのように弄<sup>ひじ</sup>るのが好きになっていた。

「ちゅっ……」

キャロンは亀頭にキスをする、竿から亀頭に向かって舌を這わせ、絡みついた精液と自分の愛液を丁寧<sup>ていねい</sup>に舐め取っていく。

「ん……んっ……綺麗にしてあげる……ちゅっ、ちゅっ」

そして、竿を強く扱き、中に残っている精液も吸い出していく。

「こんなキノコみたいな形してるだけなのに、どうやってあんなに気持ち良くさせてくれるの？ うふっ、おちんちんって不思議……んっ、んっ」

キャロンは頬ずりするように、もう一度ペニスを舌を這わす。

「……次はあたしの口でして」

少し挑戦的な眼差しをマリオに向け、精液をねだるように陰嚢をギュウギュウと揉みしだきながらペニスを喉奥まで咥え込むキャロン。

「フフン、いいだろう……」

マリオは金色のポニーテールを驚掴みにすると、彼女の頭を前後に振り始める。

「んぐっ！ ……っ、んっ！ んっ、んんんっ！」

亀頭がキャロンの喉の奥を蹂躪し、嘔吐く間も与えない激しいイラマチオ。

「んっ、ごほっ！ んぐっ！ おっんんっ！」

レイプ同然の性戯に苦痛で顔を歪ませるキャロンだったが、心が満たされていくのを感じていた。

（こんなに苦しいのに……うれしいって思ってるあたし……すっかり変態よ……）

「んんっ、おふっ！ ごふっ！ んんっ！」

(でもいいの、ラモー様にあたしの全部を使ってもらえて幸せよ)

「さあいくぞ、しっかり飲め！」

マリオがそう言うや否や、キャロン喉奥を容赦なく撲ち付けるペニスが爆発的な射精を始める。

「んんっ！……んふっ、んんっ、んんん」

ドクッ、ドクッ！

吐き出される精液がコクコクと音を立て、キャロンの喉を通っていく。しかし、大量の精液は氾濫を起こし彼女の鼻腔、気管へと逆流していった。

「ごほっ！……んぐっ……ごほっ！……」

咳き込みながらも濁流を飲み干していくキャロン。

ドクッ！ ドクッ！

(ああ、ラモー様の精液もで一杯になっていく……)

ドク……ドク……

喉から引き抜かれていくペニスを名残惜しそうにキャロンの目が追っていく。

「……こほっ……こほっ……やん、こぼしちゃった」

胸元に滴り落ちた精液を掌で両の乳房へと塗り拡げていきながらマリオを見上げるキャ

ロン。苦痛の涙で濡れた頬は牡おすにすっかり支配された悦びで朱に染まっていた。

そんなキャロンの姿にマリオ・ラモー・ルーは思わず喉を鳴らしてしまっていた。

「この牝おんなを孕ませたい」そう思ったのはいつ以来か……否、未だかつて持ったことのない感情かもしれない。

そんなマリオ・ラモー・ルーの欲望を見透かしたかのように、キャロンは四つん這いになり尻を突き出すと、両の掌てのひらで陰唇を拡げ膣口を晒した。

「次は後ろから……欲しいの……」

キャロンの少女のようにはにかむ表情、それでいて魅惑的な笑みにマリオ・ラモー・ルーはペニスがはち切れそうになるほど強張っていくのを感じていた。

「おおっ！」

獲物に襲いかかる野獣のようにキャロンの首根を掴み、地面に組み敷くと後背位で彼女を貫いた。

「あうっ！」

ズンッ！ ズンッ！

そのまま体が引き裂かれるかと思うほどの深く激しい挿入うめに呻くキャロン。

「うぐっ！ んんっ……ひぐっ！」

ズンッ！ ズンッ！

マリオはキャロンの両腕を掴み、彼女の無防備の子宮を肉槍で刺る。

「はうっ！ もっと奥……もっと奥に入ってきて……うぐっ！」

ズンッ！ ズンッ！

「ああっ！ 気持ちいいっ……気持ちいいの！」

子宮を激しく震るわされる快感で体が痺れていき、徐々に頭の中も真っ白になっていくと、いつもの想いが心に浮かんでくる……

(ダメよそんなの……あたしまだ恋も知らないのに……でも……でも……あたし、ラモ様の赤ちゃんが欲しい)

しかし、それは叶わぬ望み。今までどれ程の精液を子宮に浴びても妊娠しなかった事実がそれを証明しているのだから。

「ああっ！ ちようだい……赤ちゃん出来ちゃうくらいたくさん！」

どうにもならない想いから溢れ出たキャロンの心の内が牡の猛りを燃え上がらせる。

「ウホッ！ ウホッ！ ウホッ！」

ポルチオを殴打している亀頭から精管が生えだし、キャロンの子宮へと挿入される。

「ひっ……はあああんっ！」

(ああっ！ ラモー様があたしの一番大事なところに入ってくる！)

子宮への直接射精の期待が、身も心も精液を求めてやまないキャロンに今まで経験したことのない昂揚をもたらし、絶頂の予兆がキャロンの腰をビクンビクンと跳ねさせる。

「早く！ 早くっ……イっちゃう、あたし！ ……もうイっちゃうからあ！」

「ウホッ！ ウホッ！ それっ！ 好きなだけ孕はらむがよい！」

ビュッ、ビュルッ、ビュルッ、ビュルッ、ビュルルルッ！

直接子宮内に射精された精液が胎内を満たしていく。

「ああっ！ ああっ！ ひっ……くう！ イクううううう！」

キャロンはえも言われぬ恍惚の表情を浮かべていた……。

「はああ……はあ……はあ……」

地べたに投げ出すように体を横たえたキャロン。激しいオルガスムスの余韻で胸は大きく上下し、下腹部は艶なまめかしく波打ち、半開きとなった陰唇から覗いた腔口からはトプトプと精液が溢れ落ちていた。

(こんなにたくさん注がれちゃったらホントに出来ちゃうかも……)

妊娠してしまふ事に嫌悪感はなかった。むしろラモー・ルーの子を身籠もるかも、とい

う期待に自然と笑みが零れ、キャロンは未だ精液の熱さが残る下腹部を撫でていた。

「フフフ、牝の本能のまま精液を求めるおまえの姿、美しかったぞ」

「違うの、あたしほんとうにラモー様の赤ちゃんが欲しいと思ったの」キャロンはそう言おうとしたが、恥ずかしさに口ごもっている間に……、

「おまえはセックスの時だけは本当に美しい……」

ラモー・ルーの二の句がキャロンの表情をくるりと不機嫌なものに変えた。

「あーっ、その、っだけ、っってなんですか？」

キャロンはぼっと上体を起こすと態とらしくセクシーなポーズを取ってみせた。

「あはん、普段から大人の色気出てませんか？ だって今までラモー様と一杯セックスしてきたんだもん……きゃん、あたししたら何言ってるのかしらエッチ！」

一人で勝手に盛り上がってるキャロンからは先まで漂わせていた妖艶さが嘘のように消え、いつものお転婆娘に戻っていた。

渋い顔で首を左右に振るラモー・ルー。

『もっと見せて……』

「む？ ……今、何と言った？」

「えっ？ ……一杯セックスしたから大人の色気出てませんか？ ……って」

モジモジと恥ずかしそうに答えるキャロンを無視して、ラモー・ルーは耳に手を当てた。

「……？」

『もつと見せて……』

「まだだ」

「あつ、ラモー様、あたしも聞こえました」

辺りがしんと静まりかえる中、耳を澄ますキャロンとラモー・ルーだったが、それ以上は何も聞こえず……、

「ラモー様あ……キャロン……」

代わりに二人を呼ぶサラの声が近付いてきた。

「二人ともここにいたのね……あつ」

キャロンの体に残された情事の痕しるしに気付いたサラが頬を膨らませた。

「あーもう！ 抜け駆けしたのね、キャロン」

「えへっ」

開けっ広げていた両足をあたふたと閉じ、ペロツと舌を出し苦笑いするキャロンだった。

「声」おわり